

樋口一葉著「大つごもり」ワイド版 岩波文庫、岩波書店 2004年10月15日刊を読む

## 大つごもり

行きちがへに三之助、此処と聞きたる白金台町、相違なく尋ねあてゝ、我が身のみすぼらしきに姉の肩身を思ひやりて、勝手口より怕々のぞけば、誰れぞ来しかと竈の前に泣き伏したるお峰が、涙をかくして見出せば此子、おゝ宜く来たとも言はれぬ仕義を何とせん、姉さま這入つても叱からはませぬか、約束の物は貰つて行かれますか、旦那や御新造に宜くお礼を申て来いと父さんが言ひましたと、仔細を知らねば喜び顔つらや、まづまづ待つて下され、少し用もあればと馳せ行きて内外を見廻せば、嬢さまがたは庭に出て追羽子に余念なく、小僧どのはまだお使ひより帰らず、お針は二階にてしかも聾なれば仔細なし、若旦那はと見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の真最中、拝みます神さま仏さま、私は悪人になりまする、成りたうは無けれど成らねば成りませぬ、罰をお当てなさらば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬ事なればお免しなさりませ、勿躰なけれど此金ぬすませて下されと、かねて見置きし硯の引出しより、束のうちを唯二枚、つかみし後は夢とも現とも知らず、三之助に渡して歸したる始終を見し人なしと思へるは愚かや。

P19 ~ 20

大勘定とて此夜あるほどの金をまとめて封印の事あり、御新造それぞれと思ひ出して、懸け硯に先程屋根やの太郎に貸付のもどり彼金が二十御座りました、お峯お峯、かけ硯を此処へと奥の間より呼ばれて、最早此時わが命は無き物、大旦那が御目通りにて始めよりの事を申、御新造が無情そのまゝに言ふてのけ、術もなし法もなし正直は我身の守り、逃げもせず隠られもせず、慾かしらねど盗みましたと白状はしましよ、伯父様同腹で無きだけを何処までも陳て、聞かれずば甲斐なし其場で舌かみ切つて死んだなら、命にかへて嘘とは思しめすまじ、それほど度胸すわれど奥の間へ行く心は屠処の羊なり。

お峯が引出したるは唯二枚、残りは十八あるべき筈を、いかにしけん束のまゝ見えずとて底をかへして振へども甲斐なし、怪しきは落散し紙切れにいつ認めしか受取一通。

(引出しの分も拝借致し候 石之助)

さては放蕩かと人々顔を見合せてお峯が詮議は無かりき、孝の余徳は我れ知らず石之助の罪に成りしか、いやいや知りて序に冠りし罪かも知れず、さらば石之助はお峯が守り本尊なるべし、後の事しりたや。

P23 ~ 24

[コメント]

明治文学の最高峰の一人、樋口一葉の「大つごもり」。手に汗にぎる物語の最終シーン。明治初年の東京下町のほろ苦くもある人情味あふれる生活の一場面がしのばれる。それにしても、20 歳になって間もない一葉の筆力、構想力には脱帽するしかない。「日本の代表的文化」とも言える樋口一葉の作品にもっと目を向けたい。

- 2010 年 12 月 31 日 林 明夫記 -